

【新刊紹介】

泉 澄 一 著

『釜山窯の史的研究』

(1986年10月刊 関西大学出版部・13,000円)

本書は、泉澄一氏の10年間に及ぶ、対馬の宗家文庫や国立国会図書館、韓国に所蔵される「宗家文書」の調査の集大成とも言うべきものである。ここに言う釜山窯とは、対馬藩が朝鮮釜山の倭館内で寛永から寛保までの約100年間にわたって経営した、日本人が海外で開いた唯一の陶窯である。この釜山窯については、朝鮮側の史料をもとにした浅川伯教氏らの僅かな著作があるが、陶器愛好家の趣味の域を出ないものであり、臆測も多く含まれるものであった。「宗家文書」という釜山窯経営者側の史料が未整理のままにされていたことに、この研究の限界があったわけである。この点において、本書は「宗家文書」を駆使して釜山窯の実態を明らかにした、初めての実証的な研究書であると言える。

序章、終章を含めて10章の構成をとる本書では、序章において従来の研究の様々な問題点や誤りを指摘し、第一章以下に開窯以前から閉窯までの釜山窯をめぐる諸状況を克明に述べている。対馬藩が日朝貿易を独占していたことはあまりにも有名であるが、その実像は意外に知られていない。ここに描かれた、釜山窯開窯のための朝鮮への陶土・陶工の要求をめぐる対馬・朝鮮間の交渉のあり方や日本の政界や茶湯界との関係は、その一例を示すものとして興味深いものがある。

また、中庭茂三に代表される陶工頭が釜山へ渡り、焼物に対する指示を朝鮮人陶工らに与えていた事実も発掘されている。技術は朝鮮、絵柄や焼成の具合についての美的感覚は日本のものという特異な焼物が誕生していたわけである。第七・八章では、これに関係して、絵柄等を細かく指示した「御詠物控」、「御注文摺」が紹介されている。当時の技術交流を示す好例として評価できるだろう。

著者の視点は、釜山窯そのものの歴史にあるのではない。釜山窯を経営した対馬藩が、どのような状況下で、どのように朝鮮側と交渉を進めていったのかを究明した上で、釜山窯を日朝交渉史の枠組の中に如何に位置づけるべきかを考えようとするものである。ただ、全体としては、「宗家文書」を中心に通史的な記述がなされており、史料紹介的要素が多少強く感じられる点是否めない。

800頁を超える大著であるため、そのすべてについてここで触れることはできないが、鎖国政策下の日本にあって海外を活動の場とした日本人が存在したことを知る上で貴重な労作であることは間違いない。この釜山窯は後には町人請負となり、その役目を終えるが、庶民まで巻き込んだ活動であったことも注目できるだろう。

外交史・茶道史・技術史の他、様々な視点、興味の持ち方によって、本書に対する読者の評価は変わるだろうが、一読の価値ある好書であろう。(澤井浩一)